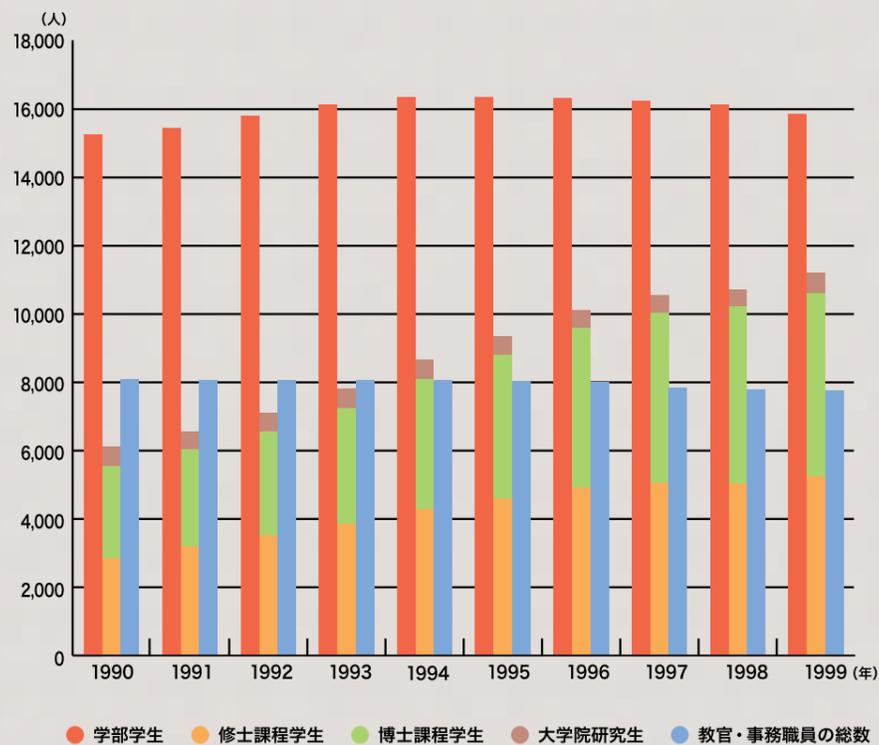


【図1】学部学生、修士課程学生、博士課程学生、大学院研究生、教官・事務職員の総数の推移



東京大学は、学部および大学院の学生数、教職員の数が増えつつも、国立大学である。現在、学部数は一、大学院研究科の数は二一、さらに本年四月から情報学環・学際情報学府という新しい組織も加わった。それだけでなく、本学には附置研究所・研究センターが数多くあり、先端的な研究を進めているだけでなく、スタッフは関連する研究科を併任し大学院教育に欠かせない存在となっている。二の研究科のそれぞれは、右頁にみられるように、本学が三極構造と呼んでいる、本郷、駒場、柏のキャンパスのどこかを拠点にしている。ただし、平成一一年度から学生を迎えた新領域創成科学研究科は、柏キャンパスの完成まで本郷キャンパスで教育研究を行うことになっている。

大学院重点化は、本学の教育研究にさまざまな変化を引き起こしつつある。それはなんといっても、大学院という高度な教育の場の拡張であるが、新領域創成科学研究科の誕生に象徴されるように、質的な変化をも内包している。ここで注意しておきたいのは、大学院重点化といっても、本学は学部前期課程の教養リベラル・アーツ教育はむしろ、学部後期課程の専門教育をも充実させ、大学院教育と連動させる道を選択したことである。

本特集のテーマ、「大学院を重点とする大学」を目に見える形で紹介しよう。図1は、本学の構成員である学部学生、大学院学生、大学院研究生、さらには法学政治学研究科専修コースの学生数と、教官・事務職員数の変

遷を示している。大学院重点化が法学部ではじまったのが平成四一九九二年だったが、一九九一年からの推移をたどることになった。この一年間、本学では学部学生が微増から微減に転じているなかで、大学院学生は倍増した。四年前には一五パーセントであった学部学生に対する大学院学生の比率は、一九九一年の三六パーセントから一九九九年の六七パーセントへと急接近している。

修士課程学生と博士課程学生の増加率は、ほぼ近似している。しかし、修士課程の標準的な在学年数は二年、博士課程のそれは三年である。また、医学系研究科(健康科学・看護学専攻と国際保健学専攻を除く)の各専攻と、農学生命科学研究科の獣医学専攻は、修士課程は四年制の博士課程だけをもってしている。したがって、大学院の入学者総数は、修士課程に対し博士課程は六パーセント強であるにもかかわらず、在籍数ではかなり接近している。なお、初期に微増した学部学生数は、ベビー・ブームへの対応でなされた臨時増募の影響が大きい。一九九五年から減少しているのは、この臨時増募を徐々に解消してきたからである。

教官・事務職員数は減少傾向にある。この多くは事務職員にみられており、教官数は若干増加した。とくに教授および助教授が増加している。とはいっても、大学院学生数が急増するなかで、教官一人あたりの大学院学生数は、一九九一年に一・四人、一九九九年には二・六人になっている。

を重点とする大学  
大学院

目で見る  
東京大学

東京大学は、新しい世紀に向けてさらなる進化を目指している。この一〇年間の変貌を、さまざまな統計から振り返り、課題をも浮き彫りにする。

本郷キャンパス

- 人文社会系研究科
- 教育学研究科
- 法学政治学研究科
- 経済学研究科
- 理学系研究科

- 工学系研究科
- 農学生命科学研究科
- 医学系研究科
- 薬学系研究科

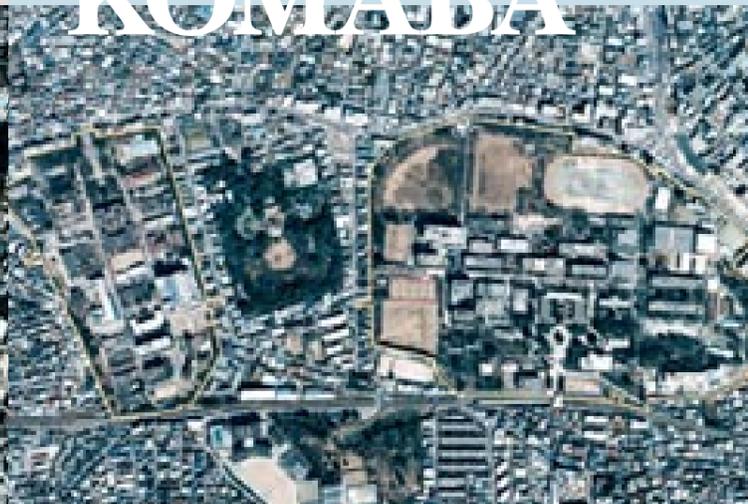
HONGO



駒場キャンパス

- 総合文化研究科
- 数理科学研究科

KOMABA

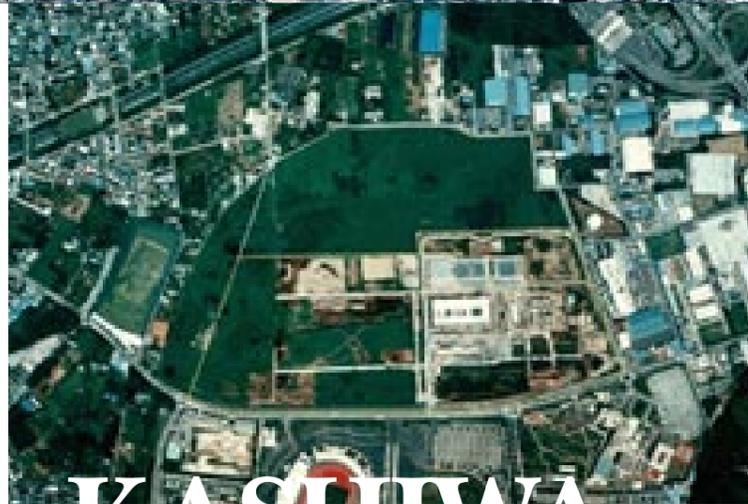


特集

を重点とする大学  
大学院

KASHIWA  
柏キャンパス

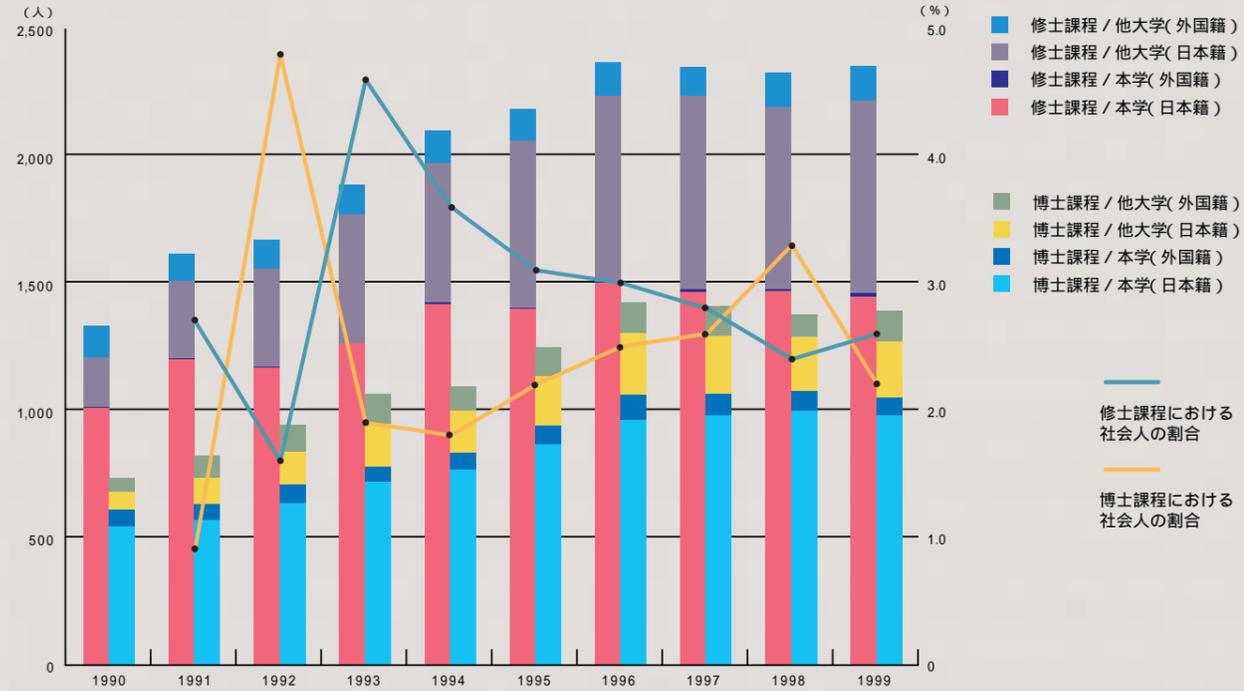
新領域創成科学研究科



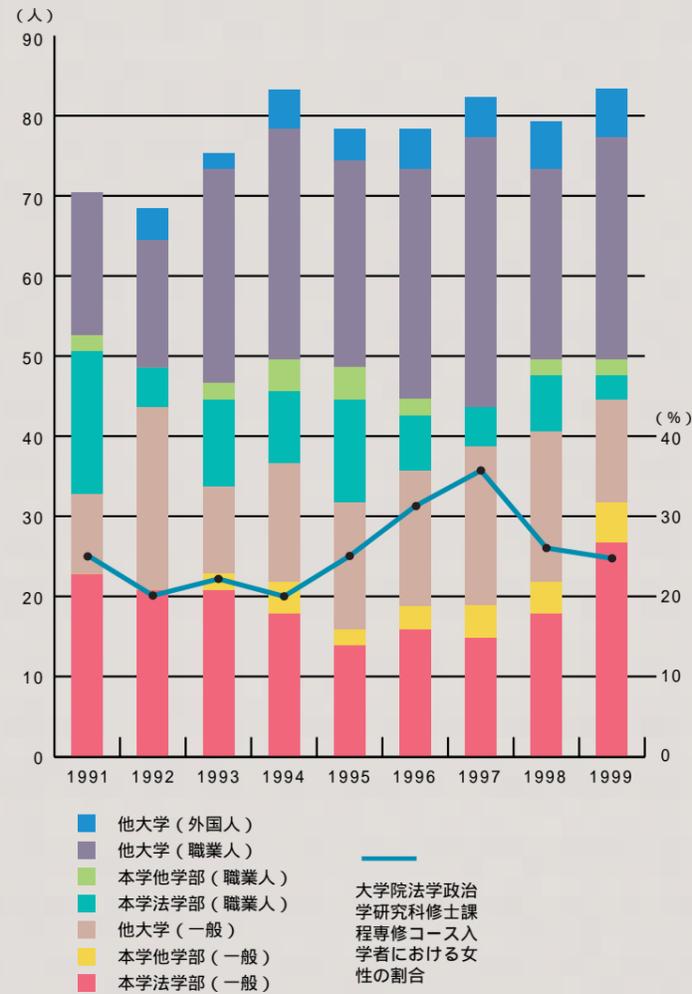
本学では、平成3年4月に法学部が大学院法学政治学研究科に改組したのを皮切りに、平成9年4月からすべての学部で大学院が重点化されました。大学院重点化とともに起こった変化は多様で、これからは多くの変化を推し進めていくことになるでしょう。その初期の段階にある私どもの素顔の一端を紹介します。

まずは本学の構成員の変遷を追い、さまざまなキャリアをもつ大学院や専修コースの学生たちが、どのような教育を受け、どのような研究をし、そしていかに暮らし何を考えているのかを取り上げました。また、大学院学生だけでなく学部学生を教育し、自らも一線の研究を行う教官は、どのように時間を過ごしているのかも紹介します。

【図5】修士課程学生、博士課程学生の出身および社会人の割合



【図6】大学院法学政治学研究科修士課程専修コース入学者数および女性の割合



者では、本学出身者が多いとはいえ、重点化の進行とともに他大学出身者が急増し、最近では約四割を占めている。外国籍で他大学出身とは、ほとんどが母国の大学を卒業した学生である。

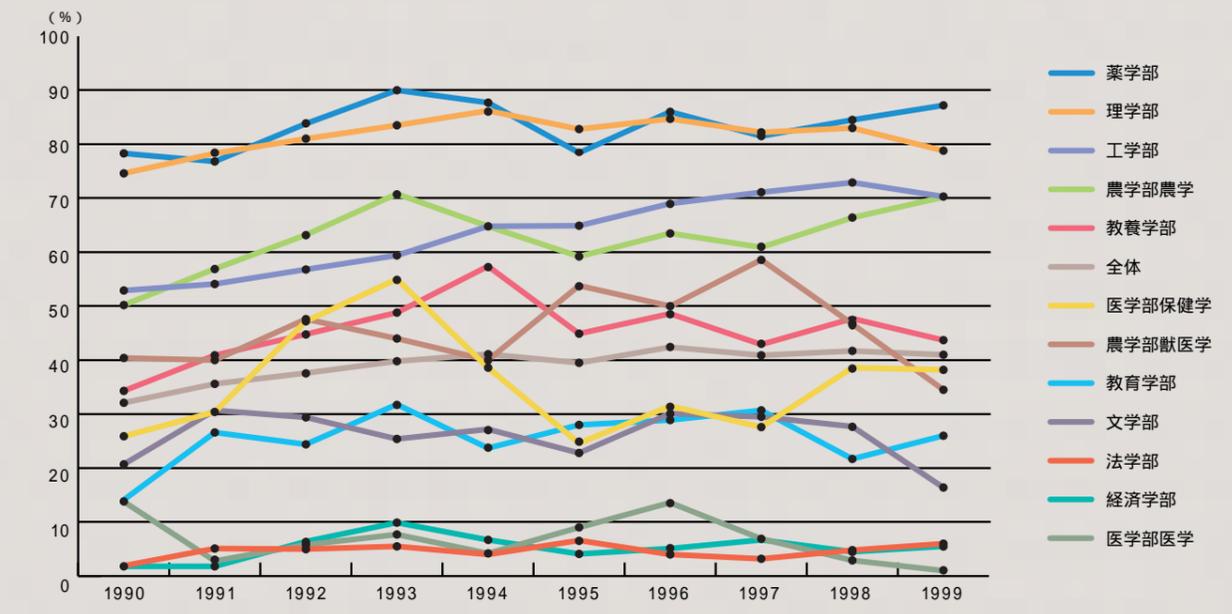
修士課程には修士課程から進学するケースが多いので、日本国籍あるいは外国籍を問わず、本学出身者が多いのは当然であろう。それでも、他大学出身者の割合は重点化とともに上昇傾向にある。

図5には、大学院学生に占める社会人の割合も示されている。この割合は、一九九二～九三年頃がピークのようにみえる。ただし、社会人の割合自体がきわめて小さいので、偶然変動と捉えるべきかもしれない。むしろ問

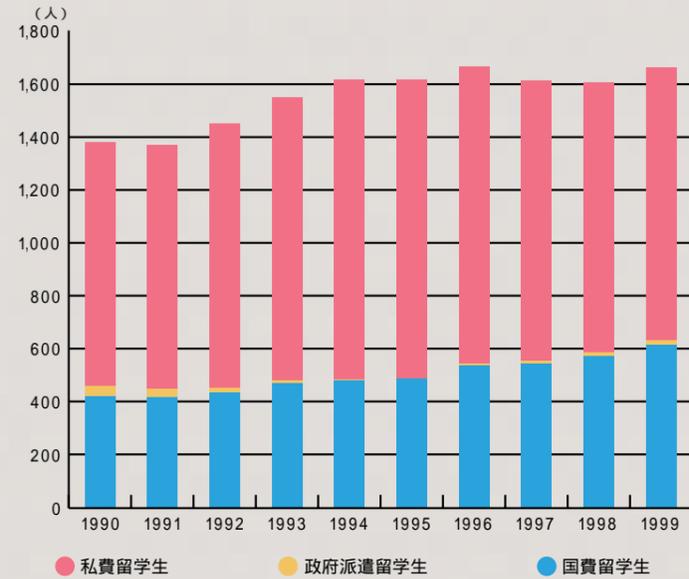
題は、社会人学生が今後増加するか否かである。

図6は、法学政治学研究科の専修コースの入学者を、本学法学部、本学他学部、他大学という三カテゴリーと、さらに外国籍、職業人、そのほか一般と表記の三カテゴリーにわけた。本学法学部出身者の占める割合は約二五パーセントであり、職業人および一般の他大学出身者が半数前後を占めている。職業をもっている学生が、半数あるいはそれ以上を占めていることも特徴で、このコースの設置目的にかなっている。なお、このコースの入学試験では、外国人、職業人一般に対し、それぞれ別のシステムで選抜していることが、このような状況をもたらしている。

【図2】学部別の大学院進学率



【図3】大学院留学生数の推移



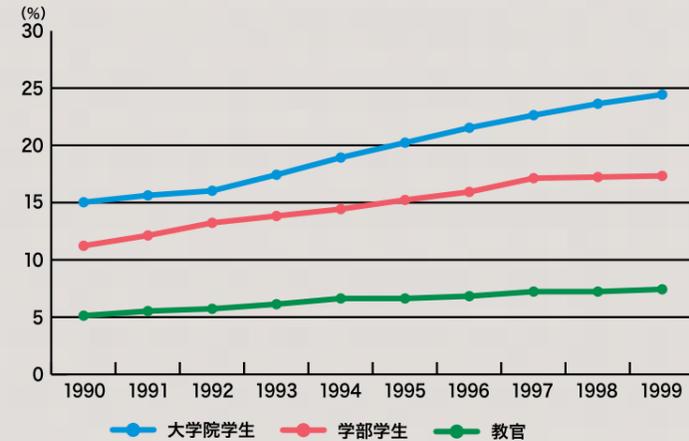
修士課程進学率を学部別にみると(図2)、五～六パーセント程度の法学部・経済学部、ほぼ二〇パーセントの文学部・教育学部、七〇～八〇パーセントの理系学部という、はっきりした違いが浮かび上がる。文系の学部で低いのは、大学院に進学するのが研究者を志望する者にほぼ限られているためだが、法学政治学研究科では専修コースができたことにより大学院の機能も変わりつつある。これに対し、理系の学部では大学院に進学するのは「ふつうのこと」になりつつある。医学部(医学科)で比率が低いのは、卒業すると同時に研修医になるからで、その後の大学院進学率は七パーセント程度である。

大学院留学生は、この一年間微増している(図3)。私費留学生が高比率で存在するが、東京は家賃をはじめとする生活費が高いこと、そして残念なことに学費が不足していることが、留学生のさらなる増加の大きな制約になっている。

図4は、学部学生、大学院学生、教員別の女性の割合を示している。この割合はすべてで上昇しているが、大学院学生でとくに著しい。とはいっても、やっと二五パーセントである。この図は、女性教官がいかに少ないかも示している。

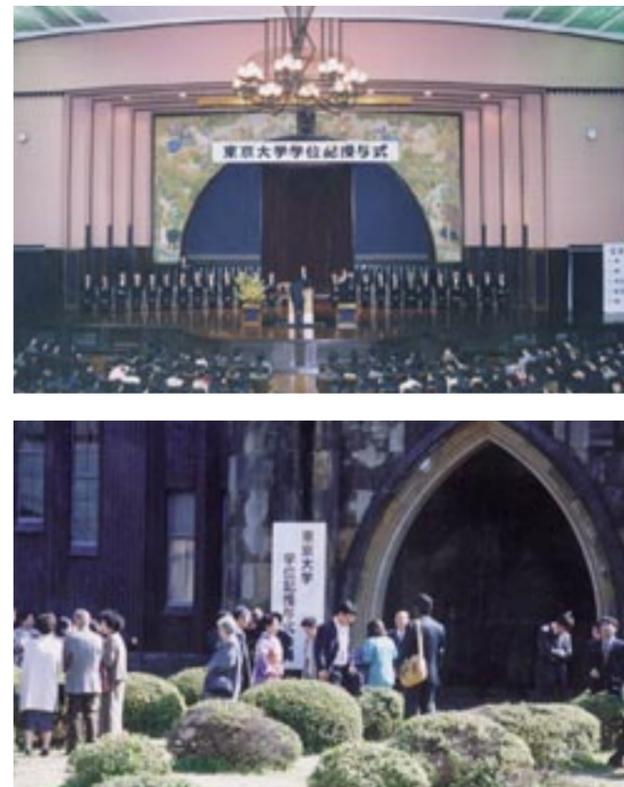
大学院修士課程と博士課程に入学した学生について、出身別に示したのが図5である。ここでは、日本国籍か外国籍か、そして本学出身か他大学出身かにつけた。修士課程入学

【図4】学部学生・大学院学生・教員別の女性割合



# 大学院大学の の主人公

大学院への進学、そして卒業後の就職あるいは研究者への道。学生たちは自分の好きな学門をきわめる夢をいだきながら、今そこにある現実と直面する。彼らにとっての夢と現実、そして大学院とは。



司会 学生が重点化された大学院をどのよう  
にみているかを知るために、立場のちがう二  
人の学生に参加してもらいました。博士課程  
と修士課程、理科系と文科系、男性と女性  
企業とアカデミアへの就職希望といったちが  
いがあります。まず、自分が大学院へ進学し  
た理由、そして自分のキャリア・パスの中で  
大学院をどのように位置づけているのか、と  
いうところから話していただきましょう。

司会 お二人とも大学院への進学は、自然の  
流れだったということですが、柴田くんの場合  
には、いつ頃、またどういう理由で就職を  
考えたのですか。

柴田 これは理系に共通した傾向ですが、ま  
ず大学院に行かなければ何も始まらない。研  
究者になるにしても、企業に就職するに  
しても、大学院に行くというのは当然のことであ  
るとい意識が強くありました。

柴田 両方の可能性を考えていたので、修士  
課程で適性をみきわめようと思っていまし  
た。一年生の二月頃、就職について考える  
ようになり、準備を始めました。僕は遅かつ  
たほうです。大学の研究の世界というのは、  
僕が想像していた以上に孤独な世界で、ちょ  
っと厳しいなという印象があり、一方でチー  
ム・プロジェクトを運営していくことにすこ  
く興味がありました。

木谷 今は博士課程にいますが、学部から大  
学院に上がるところで美術史から日本文学に  
専攻を変えています。希望としては研究者に  
なりたいたので、修士課程から博士課程へ、自  
然に上がってきたと考えています。

司会 木谷さんは、将来大学の研究者になる  
うとしているわけですが、そういう孤  
独さみたいなものは感じますか。  
木谷 ええ、それは感じますが、個人的には  
そのほうがあっていきます。(笑)

柴田 大学院工学系研究科  
応用化学専攻修士課程2年

司会 それでは実際に大学院に進学して  
研究者になるうということに対する大きな障害  
として感じたことはありますか。

柴田 それは感じました。博士課程を出ても  
一人前になるのに長い時間がかかる。長くて  
も期間がわかっていけばいいのですが、たと  
えばいつ助手になれるかわからない。しかも  
それが自分の実力だけではなく、周りのポス  
トの状況にもよるとい、やはり不確定で、  
僕には障害に思えました。

司会 木谷さんは、博士課程までいく選択を  
していますが、それに伴う経済的な問題、そ  
して将来の研究者としてのポストの問題、そ  
れはどのように考えますか。

木谷 修士課程にはいってからは育英会の奨  
学金とアルバイトで、学費、交通費や本代な  
どは何とかしてきました。奨学金もアカデミ  
ックな研究職につけば返さなくてすみます  
が、在学期間が終わって何年以内に就職  
しないといけないとか、いろいろ規定が厳し  
いですよね。女性の場合、すごく優秀な方で

木谷 そうですね。たえば非常勤講師では返  
さなくてはいけません。好んで非常勤  
になっていくわけでは全然なくて(笑)、不  
運にも決まらないで、経済的に苦労してい  
る人に限って返さなくてはいけないのが、すこ  
くわかりにくい思いですね。

木谷 理系の場合は、表に見えるものがちが  
うても、突き詰めてみると論理は一緒だつた  
り、スキルが一緒だったりします。そういつ  
た意味では、自分の活躍できる場を限定しな  
いで、視野を広くしてほかに活躍の場を常  
に求めているような姿勢をもつのがいいと思  
います。

柴田 経済的に将来の不安はありますけど、  
優秀な人には本当にせひ来てもらいたいと思  
います。内部からの進学があまりないので少  
し心配しています。だから、そういう人た  
ちが安心してこられるような状況を整えてもら  
えればと思います。

司会 柳澤幸雄やなきさわ・ゆきお 大学院新領域  
創成科学研究科教授/鈴木眞理すずき・まこと 大  
学院教育学研究科助教授)

木谷 非常に面白い。職人のような専門家を育てる  
ための講義ではなく、もっているスキルをち  
がう分野に応用するといった発想の講義、視  
野を広げるような講義を、僕が先生になつた  
らもってみたいと思います。また、研究室で  
指導していることが、学生がそのスキルをも  
つてほかにいくことにも貢献できるような教  
育体制をつくってあげたいと思います。

木谷 国際化と情報化とが、文学でいえば  
比較だとか、何かそういうのが新しく、こ  
れから進むべき方向だという世の中になつて  
きていますが、基礎がしっかりしていないと  
話にならない、という気があります。最近手  
取り足取り教育するという風潮が出てきてい  
ますが、そうではなくて、一言一言、学生の  
ために助言し、彼らが自分の中で反すうして  
受けとめることができる昔ながらの教育を、  
私はやりたいという気持ちでいます。

司会 では最後に、これから大学院に進もう  
としている人に対して何か一言あればお願い  
します。

柴田 大学院に進学して、経済的な状況はど  
うですか。  
司会 大学院に進学して、経済的な状況はど  
うですか。

柴田 僕が今とっている講義の中に、プレゼ  
ンテーション形式の授業があるのですが、理  
系の枠にとらわれず、プレゼンテーション・  
テクニク、リポート・テクニク、リポー  
ティング・テクニクを磨こうというもので、

## コメント

### 大学院とは自分を発見する場

大学院医学系研究科内科学専攻博士課程2年  
萩原清文さん

臨床医学系の大学院生は、外来通院患者さんや入  
院患者さんを担当しながら研究をすすめています。  
患者さんに接することで病態の解明や治療の開発  
に対する動機を高めるわけです。診療しながらの研  
究ですので、どうしても時間的制約があることはや  
むを得ません。しかし、純粋な基礎医学の研究とは  
また一風ちがった、臨床医ならではのセンスや技術  
を生かした研究というものはあるはずで、それを理  
想として励んでいます。大学院に入ったとき、『大学  
院とは自分を発見する場である』と、学生時代の恩  
師の多田富雄先生から励ましの言葉を頂きました。  
診療と研究の間を右往左往しながらも、自分が今後  
何を求めているかを発見する場として、残る大学院  
生活を最大限に生かしたいと思っています。

(はぎわら・きよふみ)

従来の大学教育に欠けていたものとは何なのか。法学政治学  
研究科に「専修コース」が開設されて一〇年。外国人を含  
め、さまざまな社会人が学ぶ「知的交流空間」の可能性。

職場から大学院へ  
大学院法学政治学研究科専修コース

「従来の学部教育とこれまでのような職場での非体系的な知識と経験の蓄積だけで本当に充分なのか」 こうした想いから、法学政治学研究科に「専修コース」が開設されて一〇年を迎えた。このコースの入学試験には、一般選抜・外国人選抜のほか職業人選抜の力テゴリーがある。企業から派遣されたOBの方々に、学生生活を振り返ってもらった。

# 社会人学生、留学生にとつての大学院

大学院  
を重点とする大学

佐々木 まずは、どのような動機で専修コースに入学されたのでしょうか。

石飛 人事部に勤務するうち労働法に興味を感じはじめ、学部時代には資格試験や卒業のための勉強だけしかしていませんでした。から、いっぺん掘り下げて勉強してみたいということになりました。

福田 上司が薦めてくれました。企業不祥事が頻発したことで、また国際化の問題もありまして、自分のリーガル・マインドに根ざして判断することが大事だと考えるようになり、原理原則を学びたいと思いました。

う癖を、初心に戻ってやるうとしていたのかなという気がします。

佐々木 このコースをつくって一〇年になりましたが、司法試験予備校的なものはなかった、また、今まで大学になかった知的交流空間というものができたと思っています。こういった雰囲気について、どんなふうにお感じになりましたか。

石飛 まさに人種の坩堝のような環境が、エキサイティングな勉強の環境をつくっているのではないかと思います。

福田 いろいろなどころから専門的な知識や、あるいはちがった興味をもって集まってきた。会社に帰ってからもメールをいただいたり、オフィスに遊びにきていただいたりして、交流がつついています。

東京大学で学ぶ大学院留学生は一六〇〇人を超える。将来、コスモポリタンとしての活躍が期待される若者が、どのような思いでどのような留学生活を送っているのか。そして、その障害とは。

東京大学で世界の各国から勉強をするためにきている大学院留学生は、一六〇〇人を超えており、キャンパスのなかでもよく見かける。これらの外国人大学院生がどのような思いでどのような留学生活を送っているのでしょうか。韓国からの金さん、オーストラリアからのラクエルさん、マケドニアからのネダさん、そして台湾からの私塾は、それぞれのアイデンティティ、留学経験をもって、寒い午後熱く語りあった。

日本史学を専攻する博士課程二年の金さんは、自国の修士号をもっているが、自分の分野が日本に深い関係があるため、日本にきて

佐々木 入学してみても、なにか印象に残ったことはありますか。

福田 最初のうち何を着ているのかわからない(笑)。長年サラリーマンをやっていますと、外出時はネクタイをするものですし。授業の進め方や先生方との接し方など、わからないことばかりでした。ただ、ゼミが始まると、実務の場ではどうかといった話をする機会を与えていただき、すくなくじめました。

梅谷 専修コースの学生には四つの層があると思います。学部から直接進学してきた人たち、官公庁からきた人たち、留学生、そしてわれわれのように企業派遣や実務家の人たちです。私の専攻分野では、弁理士や弁護士、特許庁の審査官などがいらして、なまの実務感覚に触れることができました。また、学部からきた学生は理屈で押しつけてくるわけ(笑)、それともまた昔の自分を見るようで新鮮でした。

佐々木 リサーチ・ペーパーのテーマはどのように選ばれましたか。

梅谷 入学時に出した研究計画のテーマではなかったんです。実際に大学院にはいって、この分野が少し見えてきた一年目の冬学期にテーマを決めました。

石飛 私の場合、よくあるように学書が書かれているようなテーマをなぞってもしようがないので、今までに触れられていないものということで選びました。

佐々木 専修コースで学ばれたことは、現在どんなふうに使われているのでしょうか。

石飛 人事制度を抜本的に改正するプロジェクトに携わっているのですが、大学院で学んだ、最高裁判例と行政解釈だけをみておけばいいというものではない」という確信をもって、作業に取り組みました。

福田 今までは、業務の中で法律的なことに

私は、自分の専門分野に日本に留学した学者が少ないことが気にかかり、日本との学術交流を深めたいため修士課程にはいった。これらの留学生が何も知らずに日本の社会にやってきて、銀行口座の開設、公共料金の支払いはもちろん、電車の乗り換えさえも他人の援助が必要であった。日本にきたばかりのころ、日本語でうまく自分の意思を表明したいときにチャーターに助けられた。私たち大学院生にとつて、チャーターの制度は非常にありがたい。とくに論文をつくる時、チャーターは不可欠な存在だったと全員が感じていた。

アルバイトをしながら家賃が安い寮に住んでいた私費留学生に比べると、宿舍が確保できる国費留学生は、生活面や経済面でそれほど苦労をしていない。金さんは、苦笑いしながら部屋探しの門前払いを淡々と語ってくれた。というのも、前に住んでいた外国人がやうるさいタイプのため、大家さんは金さんの入居を拒否したという。外国人でも十人十色なので、日本人と外国人とのふれあいがあればあるほど、このような嫌な思いが少なくなるだろうと、金さんは思いを語った。

金さんによれば、韓国で見たりでは日本は一枚岩のイメージだったが、日本にきてみるといろいろな面をもつ社会であることがよくわかったという。ネダさんは、日本での経験はすべてがよかったと感じたという、ラクエルさんもそれに同感していた。留学生たちは、自分の人生にとつて日本での留学経験をプラスに思っている。

これから大学院にはいる外国人学生に、「積極性を出すこと、わからないとき素直にわからないといった方がいい(金さん)」、「たかさんの授業に出て日本人の友人をつくること」(ラクエルさん)というアドバイスも聞かれ

なると、どうやって言い訳をしただけのかわからないことが、気がつかないうちに身につけていたように思います。それが、専修コースにきて、原理原則を直に感じて、あるいは立法に携わられた先生方から問題意識を教えていただく機会を得るうち、一生懸命に調べて確信がもてた場合には、革新的なことでも踏み出すべきだという気持ちになりました。

梅谷 大学院でやったのは、自分で問題をみつけて解答もみつけるということの繰り返しですから、そういったトレーニングは役に立ちます。ちゃんと調べてから結論を出すとい



司会 佐々木 敦 (ささき たけし)  
大学院法学政治学研究科  
長・法学部長 (2000年3月まで)



石飛 雄高 (いしひら ゆたか)  
1997年大学院法学政治学  
研究科専修コース修了(労働法)  
現在、西日本旅客鉄道(株)人事部勤務。



梅谷 真人 (うめした まさと)  
1999年大学院法学政治学  
研究科専修コース修了(無  
体財産法)。昨年、リサーチ・  
ペーパーを基に『データベース  
の法的保護』(信山社)を  
出版。現在、富士ゼロック  
(株)法務部勤務。



福田 宗孝 (ふくだ むねたか)  
1999年大学院法学政治学  
研究科専修コース修了(商  
法)。現在、昭和シェル石油  
(株)法務室勤務。



ミレフスカ・ネダ  
大学院薬学系研究科  
マケドニア  
「4月から修士課程に進学」



金 宗植 (キム・ジョンシク)  
大学院人文社会系研究科  
博士課程2年  
韓国  
「帰国後は研究者に」



ラクエル・ヒル  
大学院総合文化研究科  
修士課程1年  
オーストラリア  
「日本語で修士論文に挑戦  
する」



司会 鄭 秀娥 (チャン・シヨウゼン)  
大学院人文社会系研究科  
博士課程1年  
台湾  
「マスコミで活躍したい」

た。大学院で勉強して自国に戻る人たちは、エリートと呼ばれるのかもしれない。そして、自国と日本とのよい関係を築き上げる原動力になるはずである。留学生がどのように生活の不自由を乗り越えるかは、個々人の努力によるべきかもしれない。しかし、政策面で宿舍や奨学金の配慮などを含め、留学生を受け入れる体制が整備されることが、この座談会で語られた大きな問題である。

記事 鄭 秀娥 (大学院人文社会系研究科社会情報学専攻博士課程)

# 教官の一週間

大学院  
を重点とする大学

東京大学には四〇〇〇人を超える教官がいる。講義や研究、そして会議、ハードでユニークな生活ぶりを克明に記録。興味津々、知られざる先生たちの一週間とは……。

大学の教官はどのように時間を過ごしているのだろうか。同僚にとっても学外の方にとっても興味津々である。教官を便宜的に「研究科長(学部長)」「教授(理系)」「教授(文系)」「若手教官(文系)」「若手教官(理系)」「女性教官」にわけ、それぞれのカテゴリーごとに複数の教官に、一週間にわたり克明に記録していただいた。女性教官は文系・理系を問わず、助教・講師にお願いし、若手教官としては、マジョリティである文系では講師を、理系では助手にお願いした。

調査指針を説明すると、ウィークデイは特記することがない限り出勤時から帰宅時までを対象に、休日は自由記載とした。各教官の報告を、編集委員会が集計・整理した。したがって、ここに示されているのはリアリティに溢れたフィクションである。  
総評すればどの教官も忙しく働いている。学部学生と大学院学生の教育に費やす時間、さらにはアドミニストレーションや本人の研究の時間は、ポストによる職務の違いと文系・理系の違いを反映している。

- A 全学・研究科(学部)研究室などの会議およびアドミニストレーション
- B 大学院学生の講義・実習・演習など(そのための準備を含む)
- C 大学院学生等の個別研究指導
- D 学部学生に対する講義・実習・演習など(そのための準備を含む)
- E 本人の研究
- F 学会など社会的な教育研究活動
- G 食事・休憩
- H 通勤

## 教授(文系)

①「弁当を食べながら英文誌の編集作業」/ ②「風邪気味だったので寝坊。でも、たまった仕事があり大学に出かけ、家に帰っても継続」  
文系の教官のほうが、会議などのアドミニストレーションの時間が長い?



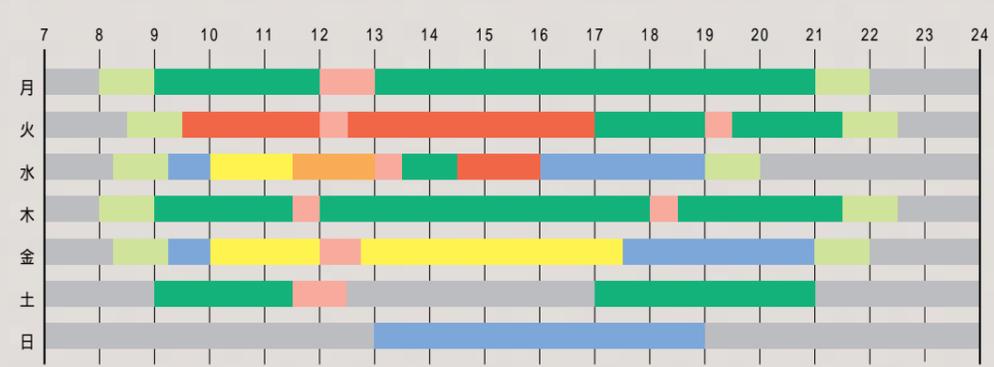
## 教授(理系)

①「昼食はおやつ時」/ ②「明日からの国際会議の準備で最後の追い込み」/ ③「学会後のノミ飲みニケーションはきわめて重要」  
理系では、論文発表・シンポジストとして出席する学会や国際会議が頻繁



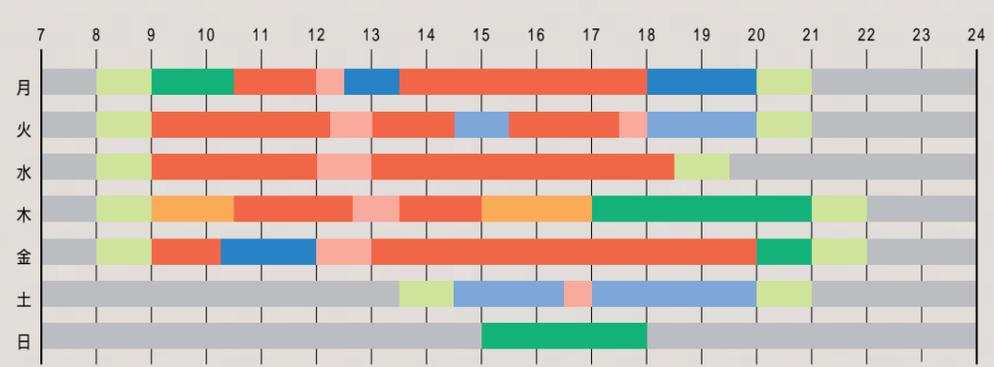
## 若手教官(文系)

①「月曜日は研究日」/ ②「ほとんど会議で暮れてしまった」/ ③「3コマの講義が終わりほっとする。夕方から、転動する同僚を囲んでワイワイガヤガヤ」  
文系の教官にとっては、学部学生の教育がやはり大きな比重



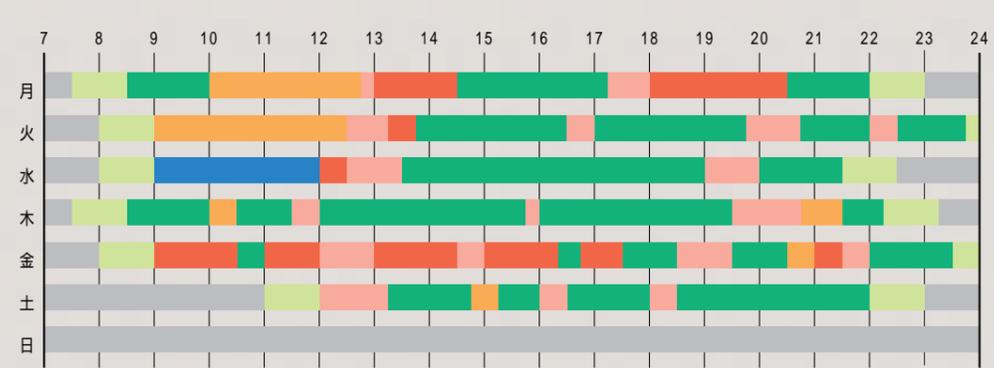
## 研究科長(学部長)

①「月曜日の午前だけは、せめて自分の時間のはずなのに」/ ②「久しぶりに学外で他大学の先生と会う会議で、気分転換」/ ③「家族との食事時間に間に合う」/ ④「犬と散歩し、午後の講演はすっきりと」  
なんといってもアドミニストレーション



## 若手教官(理系)

①「忙しくて、昼食抜き」/ ②「昼過ぎに、教室員総出で掃除」/ ③「日曜日は終日休日」  
理系の若手教官の場合、「本人の研究」と「大学院生の個別指導」とは紙一重、隣り合って実験しているのだから



## 女性教官

①「夕方に大学院生と会ったのは、研究指導というより進路相談」/ ②「たまったメールの返事書きに追われる」/ ③「日曜日は特別なことがない限り出勤しませんが、家でちょっとは研究します」  
夜や休日の大半の時間を、学会の仕事にささげる

